

シリーズ後藤新平人脈考⑫

十河 信二

後藤新平が、「東京下関間の広軌」を打ち出してから実に半世紀以上を経て、新幹線が実現した。後藤新平が三度の鉄道院総裁でも破れなかった壁を突破したのは、新平の薫陶を受けた十河信二と島安次郎の息子秀雄だった。

愛媛県新居郡中村に十河鍋作・ソウの二男として生まれる。1902(明治35)年第一高等学校入学。1905(明治38)年、東京帝国大学法科大学政治学科入学。1909(明治42)年、東京帝大法科大学政治学科卒。鉄道院に入る(後藤新平総裁)。1917~18年米留学。1920(大正9)年、経理局会計課長。1923(大正12)年、帝都復興院経理局長。復興局事件で収賄容疑のち無罪。1930(昭和5)年、満鉄理事、興中公司社長。1937(昭和12)年、林銑十郎大将の組閣に関与。戦後1945(昭和20)年愛媛県西条市長、鉄道弘済会会長。1955(昭和30)年第4代国鉄総裁。1959(昭和34)年島安次郎の息子・島秀雄とともに広軌東海道新幹線着工を実現。予算超過などを批判され、1963年退任。



【1884年~1981年】

1964(昭和39)年10月1日、東海道新幹線開通。東京駅ホームで挙行された出発式に、国鉄は十河も島も招待しなかった。10月10日、東京オリンピック開会式。



【十河信二と後藤新平の出会い】

学生時代、愛媛の先輩の松木幹一郎が「おい十河、後藤新平という偉大な人物がいる。一度、会って見ないか」と言うので会いに行った。後藤は十河に会うなり、鉄道院入りを勧めた。成績を聞かれ、「真ん中です」と答えると、後藤は「5番以内になれ。そうしたら採用してやる」と言った。各学年末と卒業試験とを平均したら、ちょうど5番になった。後藤総裁に報告にいて、「御注文によりまして5番になりました」といったら、いきなり、「ウソつけ」と怒鳴られた。しかし、本当に約束通り5番になったことを誉められ、感心して下さった。

【マンガ十河信二伝《作:つだゆみ》】



【十河信二、後藤新平に心酔】

新平は、関東大震災の復興のために設立された帝都復興院に、鉄道省から十河信二を抜いて経理局長とした。十河は、土木局長には太田圓三が最適任者であると推薦したが、新平は、太田が技術家として経験浅く年齢が若い故を以て賛成しなかった。そこで十河は、「後藤新平已に老いたり、後藤新平なればこそ、帝都復興の如き困難なる大事業も成し遂げられると思うて、自分はその傘下に馳せ参じたのであるが、最早その希望は水泡に帰した、こんなところに長居は無用だ」と云って、大声で総裁を罵倒して席を蹴って帰った。新平は、翌早朝、宮尾・松木の両副総裁を招致して意見を徴し、太田が土木局長になった。年の若い下僚に面罵されながら、その説を容れるところに、伯の性格が躍如としている。

これより後、十河は深く伯に傾倒し、身を粉にして働いた。

【「機」2011.9掲載写真より】

【十河と島が新幹線を走らせた】

1955(昭和30)年5月20日、71才という高齢でありながら、第4代日本国有鉄道総裁に就任した。国鉄OBで親子2代国鉄マンの島秀雄を「一緒に父さんの仇討ちをしよう」と口説き、副総裁格の技師長として復帰させた。「政治とカネは俺が引き受けるから」と言い、自らは政治的手腕をふるい、島とともに新幹線建設計画を主導・推進した。

新幹線工事にあたり、5年間で総額3千億円という予算問題に直面した。大蔵大臣佐藤栄作の助言により、世界銀行に1億ドルの鉄道借款を申し入れ、2年後に8千万ドルの借款に成功した。建設予算超過の責任を負い、新幹線開通前年の1963(昭和38)年5月19日に退任した。

1964年10月1日、東海道新幹線が開通。日本の高度経済成長は、新幹線開通も大きな要因となった。新平の先見性はここにもあった。



【作者:同上】